九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『存在と時間』における道具分析の存在論的射程

細川，亮一

https://doi.org/10.15017/1398591

出版情報：哲学論文集. 29, pp.1-20, 1993-09-24. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

『存在と時間』における道具分析の存在論的射程

細川亮一

「或るものの被制作性（Hergestelltheit）という最も広い意味における被造性は、古代存在論の本質的な構造契機である。」
（GA2, 33）

ハイデガーは『存在と時間』の序論で、目立たない仕方であるが、ギリシア存在論の基本性格をこのように規定している（以下これを「被制作性」テーゼと呼ぶ）。『存在と時間』という「作品全体の内で、序論のテキストが最も難しい」[1]と、ハイデガーは繰り返し語っていた。序論「存在の意味への問いの解明」を精確に読み解こうと一度でも試みた人なら、ハイデガーのこの言葉をそのまま受け取るだろう。しかし序論から第三章「世界の世界性」まで読み進めると、途端に分かりやすくなるように思える。最も難しい序論と比較して、第三章の「道具分析」は、最も易しいという印象を与えるのである。そこでは「ハンマーを用いて家を作る」ことが、少々聞きなれない術語によって分析されているにすぎないように思えるからである。[2]「道具分析」が最も好んで取り上げられるのは、恐らく最も扱い易いからであろう。しかし最も易しいと見えるのは、

『存在と時間』の道具分析を「ハンマーを使う大工職人の哲学」、あるいは「靴職人と陶工の哲学」(GA33, 137) と見なす限りにおいて、即ち道具分析における「難しい論点」を見逃している限りにおいて、にすぎないのではないか。「人間の本質が、スプーンとフォークを扱い、市電に乗ることの内にあると、主張し証明しようとする」(GA29/30, 263) という次元で、『存在と時間』の道具分析を読めば、それが最も易しいテキストに見えるのは当然である。

しかし、『存在と時間』は「存在への問いを表立って取り返す試み」であることを忘れてはならない。『存在と時間』が存在論として構想されているとすれば、道具分析も『存在と時間』を導く「存在への問い」に定位して解釈されねばならないだろう。言い換えれば、「存在＝被制作性」テーゼから、道具分析は読まれねばならない。実際、道具分析において、制作すること (Herstellen) とその派生語が集中して用いられているのである。

本論の課題は、冒頭に引用した「被制作性」テーゼの意味と射程を捉えることである。それは、『存在と時間』における道具分析の存在論的射程を明らかにすることを意味する。

1 homo faber

「被制作性」テーゼに定位して道具分析を解釈するとは、何を意味するのか。「制作すること」の内に、現存在の根本体制である「世界―内―存在」の解釈の出発点を求めることは、現存在を「制作人」(homo faber) として捉えることではないか。"homo faber" とは、シェーラーによれば、「道具を作り、柔軟で自由に結合可能な記号を発明し、それによって環境世界を加工し、あるいはこうした加工について仲間と了解しあう存在者」であり、「プラグマティズムの信奉者が人間一般、人間の理想と見なす人間類型、ギリシア哲学者の『理性人』とキリスト者の『神の子』とに対置する人間類型」である。[3]「制作人」という「人間の新たな定義の内で或る意味でプラグマティズムの運動と精神が頂点に達する」。

『存在と時間』は、二つの伝統的人間学（理性的動物としての人間というギリシア的定義、キリスト教的―神学的人間学）を批判している（GA2, 65f.）[4]。「道具の使用」（『存在と時間』第一七節では、記号を分析している）から人間を解釈することは、こうした "homo sapiens"（理性人）と "homo religiosus"（宗教人）に対して、"homo faber"（制作人）を対置することである。『存在と時間』における「道具の制作と記号の使用」の分析の内に「制作人」を読み取ることができるし、*πράγματα* からの出発は、文字通りプラグマティズムを意味する。しかも制作人に定位することは、ギリシア的な「観想―行為―制作」という価値秩序を逆転する試みである。配慮の環境世界は「仕事世界」であり、環境世界の分析は「手仕事と手仕事職人」（GA20, 259）を範例としているのだから。

『存在と時間』の道具分析を、シェーラーの人間類型論の観点から読むこと、あるいはそこにプラグマティズムを読み込むこと[5]は、確かに可能であり、一定の有効性を持つ。しかし道具分析の意味と射程を、「制作人」という人間観、あるいはプラグマティズムに還元できると主張するとすれば、こうした解釈に対して、ハイデガー自身の言葉を対置しなければならない。『存在と時間』における「道具分析」の典型的な誤解に対して、彼は講義で次のように語っている。

「人間の本質が、スプーンとフォークを扱い、市電に乗ることの内にあると、この解釈によって主張し証明しようとすることなど、私には思いもよらなかった。」（GA29/30, 263）

かくして道具分析の見かけ上の易しさは消え去る。ここから我々の解釈は出発するのである。解釈は易しい箇所の祖述ではなく、困難なテキストを読み解くことなのだから。

二　ギリシア存在論の問題圏

『存在と時間』序論の第六節「存在論の歴史の解体という課題」において、ハイデガーは近代存在論、中世存在論をギリ

シア存在論へと遡って批判的に検討し、ギリシア存在論の二つの基本性格を指摘している。「レゲインは、語ること(Ansprechen und Besprechen)の内で出会われる存在者の存在構造を獲得するための導きの糸である。それ故プラトンにおいて形成された古代存在論は『弁証法』となる。・・・」(GA2, 34)(以下これを「ロゴス」テーゼと呼ぶ)

ここで語られている「弁証法」はプラトン『ソピステス』の弁証法であるが、ハイデガーはイデア論がレゲイン、ロゴスに定位して展開されていることを見て取っている。[6] ロゴスへの問いは、ハイデガーを「存在への問い」へと目覚めさせたアリストテレスの言葉「存在はさまざまに語られる λέγεται」から、第三期の「言葉への問い」に至るまで辿りうる。

ギリシア存在論のもう一つの重要な特徴は、目立たない仕方であるが、はっきり指摘されている。それが本論の冒頭に引用した「被制作性」テーゼである。このテーゼは、『存在と時間』におけるデカルト論を導いている(vgl. GA2, 123f.) 被制作性、制作への問いも、第三期の「技術の本質への問い」に至るまで、ハイデガーの思惟の道を貫いている。「被制作性が古代存在論の本質的な構造契機である」というテーゼは、すでに一九二二年の「アリストテレス草稿」において確立している。「存在は被制作存在である。」(IA, 253)

「ロゴス」テーゼと「被制作性」テーゼとが、第六節「存在論の歴史の解体という課題」の内で提示されていることに着目しなければならない。「存在論の歴史の解体」とは、存在の問いを導きの糸として、「古代存在論の伝承された概念ストックを、最初の、かつそれ以後主導的な存在の規定がその内で獲得された根源的な経験へと解体すること」(GA2, 30)である。ロゴス(語ること)と制作(テクネー)(vgl. GA31, 72)こそが、「存在の規定がそこにおいて獲得された根源的な経験」なのである。「ロゴスとテクネーは、きわめて広く解されれば、その内で存在者がそもそもさしあたり自己を露呈する態度である。しかもこの地平において存在の理念がさしあたり形成される。」(GA26, 146) 実際イデア論(プラトンにおける存在への問い)は、「語ることと制作すること」に定位しているのである。[7]

「ロゴスとテクネー」への定位は、ハイデガーの思惟の道に一貫している。「存在の場所への問い」は「性起への問い」と

して、「立て集めを通る道」（テクネー）と「言葉を通る道」（ロゴス）を歩む。[8]「被制作性」テーゼは「ロゴスとテクネー」への問い、換言すれば、ギリシア存在論の問題圏の内で捉えられねばならない。

『存在と時間』の道具分析がギリシア存在論の問題圏の内を動いていることは、「道具」概念の導入が"πράγματα"に即してなされていることから明らかである。

πράγματα というギリシア語は、一九二三／二四年冬学期講義でハイデガーが、ギリシア人が物を言い表す五つの語の内で挙げている。

1、τὰ πράγματα（私がそれに関わる物）　2、τὰ χρήματα（使用される物）　3、τὰ ποιούμενα（制作される物）　4、τὰ φυσικά（自ら現に存在し、制作されない物）　5、τὰ μαθήματα（事象への実践的な関わりを必要とせずに、学ばれうる存在）。[9]

『存在と時間』において、πράγματα は、「配慮する交渉（プラクシス）の内でひとが関わるもの」であり、「配慮することの内で出会われる存在者」が「道具」と呼ばれている（GA2, 92）。しかし「配慮することの内で出会われる存在者」とは、「環境世界的な配慮することの内で自己を示すもの」であり、「この存在者は理論的な『世界』認識の対象ではなく、それは使用され、制作されるようなものである」（GA2, 90）。とすれば、『存在と時間』における道具の内に、「τὰ πράγματα（私がそれに関わる物）、τὰ χρήματα（使用される物）、τὰ ποιούμενα（制作される物）」というギリシア語の意味が含まれている。

制作は「或るもののために或るものを利用すること」であり、或るものの利用は「材料」への指示を含んでいる。こうした材料は結局、「それ自身において制作される必要がなく、つねに既に用在的である存在者」に突き当たる。「使用される道具において、その使用を通して、『自然』が共に開蔽されている、それは自然産物という光の内での『自然』である。」（GA2, 94）「制作される必要がない自然」とは、τὰ φυσικά（自ら現に存在し、制作されない物）に対応する（vgl. GA20, 270）。

さらに *τὰ μαθήματα*（事象への実践的な関わりを必要とせずに、学ばれうる存在）は、「制作することや操作することを停止すること」の内で認識される。「物在者を観察し規定することとしての認識することが可能であるためには、世界と配慮的に関わることの欠如が先行的に必要である。」（GA2, 82）　*τὰ μαθήματα* は、「配視的な配慮が世界内部的な物在者の理論的な開蔽へと変様する」という「学の起源」に即して捉えられるのである（GA2, §69 (b)）。『存在と時間』における「用在者―物在者」の分析は、ギリシア的な「物の理解」に定位してなされているのである。

かくして「被制作性」テーゼと「道具の導入」とがギリシア存在論の問題圏に由来していることが明らかとなった。しかし両者は如何なる関係にあるのか。

三　「被制作性」テーゼと道具への定位

「ギリシア人が *ἐπιστήμη πολιτική* として概念把握したものは、ギリシア人の世界理解自身にとって原理的な意義をもっていた。制作する作品へと人間が関わり合いをもつことが何を意味するかを、ひとははっきりと認識しなければならない。それ故『存在と時間』という書物において、道具との交渉が論じられる。それは、マルクスを修正するためでも、新たな経済学を打ち立てるためでもないし、原始的な世界理解からでもない。」（GA33, 137）

ハイデガーは一九三一年夏学期講義でこのように語っている。「ギリシア人の世界理解自身にとっての原理的な意義」を次の言葉の内に見ることができる。「ギリシア人、プラトンとアリストテレスは、制作という現象の解釈を遂行しただけでなく、哲学の根本概念はこの解釈から、この解釈の内で生じるのである。」（GA33, 137）　「制作という現象の解釈から哲学の根本概念が生じた」という洞察こそが、『存在と時間』の道具分析をその根本において導いているのではないか。「被制作性」テーゼはこの洞察を語っている。このことを、『存在と時間』への道に即して確認しよう。

『存在と時間』において道具分析は「環境世界の分析」として遂行されている。それについてハイデガーは、「環境世界の分析と、とりわけ現存在の『事実性の解釈学』を一九一九／二〇年の冬学期以来繰り返しその講義で伝えてきた」(GA2, 97, Anm. 1) と註記している。しかし既に、一九一九年一月から四月にかけての「戦争緊急学期」の講義で、現象学を前理論的根源学とし、環境世界を分析している。環境世界的なものは、「事象プラス意義性格」ではなく、「意義的なものが本源的なものであり、事象把握を通した思惟的な回り道なしに、私に直接に与えられる」(GA56/57, 73)。さらに理論的なものの優位の批判として、「環境世界—体験の脱生化」と「歴史的自我の脱歴史化」(GA56/57, 89) が批判される。こうした論点が『存在と時間』の内で生かされているのは明らかである。にもかかわらず、そこに道具への定位は見出されない。環境世界を分析することがそのまま「道具に定位した分析」であるわけではない。環境世界分析の内に道具分析が導入されたのは何故か——この問いは『存在と時間』における道具分析の存在論的射程を捉えるための不可欠の問いである。

"πράγματα" という語が表立って言及されるのは、一九二二年の「アリストテレス草稿」においてである。しかも既に触れたように、「被制作性」テーゼも「アリストテレス草稿」において確立している。「根源的な存在意味を提供する対象領野は、制作され、交渉的に使用される対象の領野」であり、「存在は被制作存在である」(I A, 253)。このことは偶然だろうか。この草稿は「ギリシア（アリストテレス）哲学の根本概念、カテゴリーの起源」について語っている。「『カテゴリー』の起源はロゴスそのものの内にあるのではないし、カテゴリーは『物』に即して読み取られるのでもない。カテゴリーは、遂行の内で配慮されうる交渉対象という、見相的に先持の内に保持された一定の対象領野を、一定の仕方で語ることの根本的あり方である。」(I A, 268)　「配慮されうる交渉対象」は、「『行為』対象」として、"ὄν ὡς πράγμα" (I A, 268) である。「存在は制作、あるいはこの交渉を照明する配視に相関的」(I A, 268) であり、ウーシアの根源的意味は「世帯、所有物、環境世界的に使用のために意のままにしうるもの」(I A, 253) とされる。そして "δύναμις, ἐνέργεια, ἐντελέχεια" は、「制作という交渉動性」から解釈され[10]、「意のままにできること」に即して規定される (I A, 267)。道具 (ὄν ὡς πράγμα)

との交渉を分析することは、「存在論の根本概念がそこから生じた制作という根源的な経験」へと立ち帰って、その地平でギリシア存在論と対決することを意味する。「被制作性」テーゼの確立が、環境世界の分析を道具に定位して遂行し、そこに「カテゴリーの起源」を求めることへとハイデガーを導いたのではないか。道具分析への定位の背景に、「存在論としての哲学」という理念の確立（vgl. GA61, 60）が潜んでいる。

このことを、「存在＝被制作存在」を明確に語っている一九二四／二五年冬学期講義『プラトン『ソピステス』』に即して、さらに確認しよう。「存在はそれ故被制作存在である。このことはウーシアの根源的な意味に対応する。ウーシアは所有物、財産、世帯、ひとが日常的な現存在の内で意のままにしうるもの、意のままに現にあるもの、を意味する。存在は、意のままになることを言う。」（GA19, 270）日常的な使用と日常的な配慮の対象の世界が、環境世界であるが、ギリシア人はこの環境世界としての世界に即して、存在の意味を読み取った。しかし「ギリシア人は存在概念の自然な起源についてのはっきりとした意識を持っていなかったし、それ故そこから本来的に存在の意味を汲み取った一定の領野への洞察を持っていなかった」（GA19, 270）のである。この環境世界という一定の領野に自覚的に立ち帰り、そこから生じた「被制作性としての存在」という存在理念と批判的に対決することが必要となる。「ギリシア人はまた、まさに *ποιεῖσθαι* というこのあり方によって限定された存在者の領野に対して、非常に特徴的な表現を持っている。それは *πράγματα* であり、それにひとが関わるものであり、プラクシスに対して現にあるものである。それ故、*ὄν, εἶναι, οὐσία, πράγματα* という語は、同様に用いられる。」（GA19, 270f.）この箇所はそのまま、『存在と時間』における「道具の導入」へと接続する。「ギリシア人は『物』に対する適切な言葉を持っていた。それは *πράγματα*、すなわちひとが配慮する交渉（プラクシス）の内で関わるものである。しかしギリシア人はまさに *πράγματα* の種別的に『プラグマ的な』この性格を、存在論的に暗がりの内に放置し、それを『さしあたり』『単なる物』として規定した。我々は配慮することの内で出会われる存在者を道具と名づける。」（GA2, 92）『存在と時間』の「道具」概念の導入の背後に、ソピステス講義が控えている。言い換えれば、「被制作性としての存在」と

いう存在理念との対決こそが、道具分析をその根底から規定している。

「被制作性としての存在」理念との対決は、『存在と時間』第三編「時間と存在」の新たな仕上げである一九二七年夏学期講義において、主題的に遂行される。この講義の第一部「存在についてのいくつかの伝統的テーゼの現象学的―批判的議論」を導く主導命題は、「存在者の存在は被制作性以外の何ものでもない」(GA24, 213)というテーゼに求められる。第一部第一章「カントのテーゼ『存在はレアールな述語ではない』」において、知覚が主題的に分析されるが、それに対して次のように言われる。「物の被制作存在は、知覚することにおける物の把握可能性に対する前提である。」(GA24, 159)　第二章のテーマである「エッセンティアとエクシステンティア」という存在論的根本概念は、「制作する態度の内で制作されるもの、あるいは制作されうるものそのものと、制作されたものの被制作性への視向に由来する」(GA24, 158)。近代存在論のテーゼを扱う第三章は、人格を主題的に論じているが、ここでも被制作性という意味での存在が、人格を理解する地平とされている(GA24, §14 (c))。「コプラの存在」を究明する第四章は表立って「制作」に言及していない。しかし「陳述の真理存在」は存在者の被開蔽性を前提し(GA24, 303)、さらに現存在自身のあり方である「開蔽することとしての真理」(GA24, 308)へと導かれる。『存在と時間』において、次のように言われている。「陳述とその構造である命題的な「として」は、解釈とその構造である解釈学的な「として」に基づき、さらに現存在の開示性である了解に基づく。」(GA2, 295)　解釈学的な「として」とは、道具との交渉において働く「配視的に了解する解釈の「として」」(GA2, 210)である。

第一部は、伝統的な存在論の基本テーゼの批判的検討を通して、存在論的根本概念がその内で獲得された根源的な経験(制作すること)へと遡る試みである。それ故、第一部は「存在論の歴史の解体」の試みと言うことができる。それによって、基礎的存在論が「現存在の存在論的分析論」の内に求められるのである(GA24, 319)。しかもここでは特に「制作する現存在」への還帰が要請されている。存在論の根本概念がそこから生じた制作という現象を解明すること――これが『存在と時間』の道具分析の存在論的課題ではないだろうか。

『存在と時間』の道具分析を、一九二二年の「アリストテレス草稿」、一九二四／二五年のソピステス講義と、一九二七年夏学期講義との間に置いてみれば、「被制作性としての存在」という基礎視点がその道具分析を導いていることは明らかであろう。このことを二つの観点から示すことができる。

一、カテゴリーの起源（四）

二、存在論の根本概念（五）

四　カテゴリーの起源

『存在と時間』の道具分析の内に「カテゴリーの起源」という問題を読み取ることができるのか。道具概念の導入に続いて、道具の最初の規定が語られる。

「厳密に解すれば、一つの道具が『ある』のでは決してない。道具の存在にそれぞれつねに道具全体が属しており、その内で道具は、その道具がそれである当の道具でありうる。道具は本質的に『何かのための或るもの』である。有用性、寄与性、利用可能性、扱い易さという『何かのために』のさまざまなあり方が、道具全体を構成している。『何かのために』という構造の内に或るものへの或るものの指示 Verweisung が潜んでいる。」(GA2, 92)

道具の構造であるこの「或るものへの指示」は、一種の関係であるが、ハイデガーは次のように主張している。「『関係』Beziehung自身はその形式的—普遍的性格のために、その存在論的起源を指示の内に持っている。」(GA2, 104)　我々はここに「『カテゴリー』の起源」（I A, 268）という問題意識を読み取ることができる。ここで語られている「関係」概念は、アリストテレスのカテゴリーである "πρός τι" に対応する。"πρός τι" は一般に "relatio, Relation" であるが、ハイデガーは "πρός τι" を "in Beziehung auf" (GA19, 642) と訳している。カテゴリーは道具の使用、作品の制作の内にその起

源を持っている。一九二四／二五年のソピステス講義は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第六巻第二章の解釈において、次のように言う。

「テクネーの対象は制作されたもの、ἔργον、制作することと仕事をなすことによって得られる作品である。この ἔργον は、ἕνεκα τινος（『ニコマコス倫理学』第六巻第二章 1139b1参照）であり、それは『或るもののために』ある。それは別の或るものへの関わりを持つ。それは οὐ τέλος ἁπλῶς(b2)、『端的な目的ではない』。ἔργον は自己の内に別の或るものへの指示を持っており、テロスとして、それは自ら道しるべとなる。すなわち、それは πρός τι καὶ τινος（b2 sq）、『或るもののために、或る人のために』ある。靴は履くために、他の人のために制作されている。」（GA19, 41）　この箇所は『存在と時間』にそのまま接続している。「ハンマー、かんな、釘の「それのためのそれ」Wozu としての制作されるべき作品は、それ自身同様に、道具という存在様式を持っている。制作されるべき靴は履くために（靴道具で）あり、製作された時計は時間を読み取るためにある。」（GA2, 94）　しかしさらに制作された作品の内には、「着用者と利用者への指示」（GA2, 95）が潜んでいる。「道具は本質的に『何かのための或るもの』である」という道具の最初の規定（指示性格）の内に、「或るもののために」としての πρός τι を読み取ることができる。言い換えれば、πρός τι（関係）というカテゴリーの起源を道具の指示性格の内に見ているのである。

以上の考察において πρός τι（関係）というカテゴリーの起源を考察したのであるが、こうした観点で『存在と時間』を読んですぐに気がつくのは、第三章のC「環境世界の環境性と現存在の空間性」がアリストテレスのカテゴリーである「場所」に対応していることである。そこで「道具の帰属すべき場所」として「方域」が解明される。そして「環境世界的な方域の非世界化」によって、同質的な自然空間が現われる。「場所」のカテゴリーは道具との交渉にその起源を持っている。『存在と時間』第六章「時間性と、通俗的な時間概念の起源としての時間内部性」が、通俗的な時間概念（時間のカテゴリー）の起源を「配慮される時間」（時間内部性）の内に求めているのは、明らかであろう。πού（場所）、ποτέ（時間）というア

リストテレスのカテゴリーの起源が「配慮される環境世界」に求められている。

道具との交渉における「このハンマーは重すぎる、別のハンマーを！」が変様して、「このハンマーは重い」＝「このハンマーは重さという性質を持つ」という陳述が成立する。これが量のカテゴリーに属するかどうかは別として、こうした事例を列挙してもあまり意味がないだろう。カテゴリーが陳述にその座を持っているとすれば、陳述の起源が道具との交渉に求められれば、十分であろう。陳述とその構造である「として」は、道具との交渉において働く解釈学的な「として」に基づく（vgl. GA2, 295）とすれば、カテゴリーの起源は道具との交渉の内にある。「『関係』自身はその形式的―普遍的性格のために、その存在論的起源を指示の内に持っている」という指摘は、その一つの例にすぎない。

道具の指示性格はアリストテレスの「関係」のカテゴリーへと我々を導いた。道具分析が如何なる問題圏の内を動いているかをさらに考察しよう。

『存在と時間』は道具分析のために、Wozu, Wofür, Wobei, Womit, Worumwillen, Woraufhin 等の術語を用いている。こうした造語法はアリストテレスの造語法をただちに想起させる。[11] 実際、"Worumwillen" がアリストテレスの術語 "τὸ οὗ ἕνεκα"（それのためのそれ）に対応することは、多くの人が指摘している。しかし "τὸ οὗ ἕνεκα" は、アリストテレスにおいて二義的であり、「一方は或る目的のためにのその目的、他方は或る人のためにのその人」（De Amima, 415b2）である。[12] この二義性をハイデガーは明確に区別している。「プロネーシスのテロスは、πρός τι でも、ἕνεκά τινος でもない。それはアントローポス自身である。・・・プロネーシスのテロスは、端的なテロスであり、οὗ ἕνεκα、Worumwillen である。」（GA19, 50）『存在と時間』において、"τὸ οὗ ἕνεκα" の二義性が、Wozu（或る目的のためにのその目的）と Worumwillen（或る人のためにのその人）として術語化されている。「Worum-willen、それへと結局すべての Wozu が立ち帰る」（GA2, 115）という言葉の内に、我々は "τὸ οὗ ἕνεκα" の二義性を読み取ることができる。

Worumwillen と同様に、Woraufhin もアリストテレスの "πρός ἕν"、あるいはプラトンの "πρὸς τὴν ἰδέαν" との対

応を語りうる。要するに、『存在と時間』における道具分析はギリシア哲学との対話・対決という問題圏の内を動いているのである。しかもそれは「存在への問い」に定位している。そのことは「カテゴリーの起源」の問題から明らかだろう。さらに「道具分析」と「存在への問い」との関わりについて考察したい。

五　存在論の根本概念

「ギリシア人、プラトンとアリストテレスは、制作という現象の解釈を遂行しただけでなく、哲学の根本概念はこの解釈から、この解釈の内で生じるのである。」(GA33, 137)[13] 「制作という現象の解釈から哲学の根本概念が生じた」というこの洞察こそが、『存在と時間』の道具分析をその根本において導いている。―― このことを確認するために、まず"οὐσία"について考察しよう。

『存在と時間』の構想を可能にしたのは、「それから現存在が一般に存在といったものを表立たずに了解し解釈するそれは時間である」(GA2, 24) という洞察である。「存在と時間」への問いは、「現存性としての存在」の内に現在という時間性格を読み取ることによって成立した。存在者の存在の古代解釈は「存在の了解を『時間』から獲得している。このことの外的な証拠は・・・存在の意味を存在論的―テンポラールには『現存性』を意味するパルーシアないしはウーシアとして規定しているということである。存在者はその存在において『現存性』として捉えられている。すなわち一定の時間様態である『現在』への顧慮によって了解されているのである。」(GA2, 34) ソピステス講義で、"ἄγειν εἰς οὐσίαν"としての"ποιεῖν"に定位して、次のように語られている。「存在はそれ故ここで全く規定された意味において、日常的使用と日常的視の範囲における一定の事象の現存性を意味する。ウーシアはこの使用に対して意のままになることを意味する。εἰς οὐσίαν ἄγειν、存在へともたらすことはそれ故日常的な生に対して意のままになることの内に置くこと、簡潔に言えば、制作することを意

味する。」(GA19, 269)　ここから既に述べたように、「存在は被制作性、意のままになることを言う」というテーゼが導かれ、「ギリシア人がそこから存在の意味を汲み取った環境世界」へと立ち帰ること、すなわち"πράγματα"への定位が要請される。

ウーシアが「所有物、資産、財産」、すなわち「存在する、意のままになるもの」を意味し、そのウーシアの意義から、εἶναι, esse, existere が解釈されている。道具は「意のままになりうる」(GA2, 93)ものであり、「最も身近で意のままになりうるもの」(GA20, 263)である。道具分析において「用在者が欠けている」という現象が分析されている。「欠けている」とは「手元にないこと」(GA2, 98)であり、「意のままにならないこと」、すなわち不在を意味する。とすれば、「用在者が欠けていること」の内に"παρουσία - ἀπουσία"(An-wesenheit - Ab-wesenheit)(vgl. GA31, 60f.)を読み取ることができる。だからこそ「用在者が欠けていること」に即して、"Praesenz-Absenz"という地平的図式が語られるのである(GA24, 442)。

ウーシアが制作に定位して捉えられていることは明らかである。「存在者は・・・その解釈を現―在への顧慮の内に獲得する、すなわち存在者は現存性(ウーシア)として概念把握されている。」(GA2, 35)　このテーゼは語ること(レゲイン)に即して論じられているが、それは「制作すること」に定位しても言いうるのである。「制作することは存在者の存在論的解釈にとっての地平である」(GA24, 165)のだから。

「制作することが存在者の存在論的解釈の地平である」ことを、『存在と時間』の内に読み取ることができる。トリヴィアルに見える命題をいくつか挙げよう。

(1)　「制作自身は或るもののために或るものを利用することである。作品の内に同時に『材料』への指示が潜んでいる。」(GA2, 94)

(2)　「作品、その都度制作されるべきものは第一次的に配慮されているものである。」(GA2, 94)

(3)　「道具は最も広い意味で扱い易く、意のままになる。」(GA2, 93)

これらは極めて分かりやすいので、道具分析が最も易しいと思うのも当然である。そこに「存在への問い」のかけらもないように見える。しかしそれぞれの命題に、一九二七年夏学期講義（『存在と時間』第三編の新たな仕上げの試み）の命題を対応させてみよう。

（1）質料という存在論的根本概念が必然的に生じるのは、「制作されたものであれ、制作を必要としないものであれ、制作する態度そのものの内にある存在了解の地平において、存在者が解釈される場合」（GA24, 164）である。

（2）「形作られ、刻印されるべき物の、先取りされた見相へと視を向けつつ、物は制作される。この先取りされ、予め視られた、物の見相は、ギリシア人がエイドス、イデアによって存在論的に思念するものである。」（GA24, 150）

（3）「ウーシアという表現は・・・所有物、資産、財産といったものを表わす。・・・従って存在者は意のままになる在るものといったものを意味する。」（GA24, 153）「ウーシアはアリストテレスの時代でもなお、日常的―前哲学的な意義において、家屋敷 Anwesen といったものを意味し、しかし哲学的な術語として、現存性 Anwesenheit を意味する。」（GA24, 449）

このように対応させれば、道具分析の内に、「存在者の存在は被制作性以外の何ものでもない」（GA24, 213）というテーゼ、すなわち「被制作性」テーゼを読み取ることができるだろう。しかも、ドイツ語に基づくだけの言葉遊びに見える "Anwesen-Anwesenheit" は、「制作すること」（意のままにすること）に定位すれば（vgl. GA33, 180）、単なる言葉遊びという印象は消え去るだろう。[14] この内にハイデガーは、「ギリシア人が存在を現在から、即ちプレゼンツから理解している」（GA24, 449）ことを読み取っている。「時間から存在了解が可能となる」という洞察が、『存在と時間』の問題構制を成り立たせているが、その洞察は「制作への問い」に求められる。「現存性は被制作性である」（GA33, 180）というテーゼは、一九三一年の講義において、アリストテレス『形而上学』第九巻の解釈をも導いている。[15]

『存在と時間』の道具分析は、一九二七年夏学期講義『現象学の根本問題』を背景にして読まれねばならない。

六　「被制作性としての存在」との対決

『存在と時間』における道具分析は「被制作性としての存在」という観点で読まれねばならない。ギリシア存在論の根本概念の誕生地に立ち帰ること――　このことの内に『存在と時間』における道具分析の存在論的射程を捉えることができる。それは「存在論の歴史の解体という課題」を遂行することである。解体は「存在論的根本概念の由来の証明」(GA2, 30) なのだから。しかしそれは存在論的伝統を払い落とすという消極的な意味を持つのではない。「解体は逆に、存在論的伝統をその積極的な可能性において、そしてつねに同じことだが、その限界において画定すべきである。」(GA2, 31)　「存在論的伝統をその限界において画定する」とは、如何なることなのか。

「アリストテレス草稿」において、既に述べたように、「根源的な存在意味を提供する対象領野は、制作され、交渉的に使用される対象の領野」であり、「存在は被制作存在である」(I A, 253) とされた。この指摘は次の問いのもとでなされている。「人間の生を究極的に性格づける存在意味は、まさにこの対象とこの存在との純粋な基礎経験から真正な仕方で汲み取られているのか、それとも、人間の生はより包括的な存在領野の内部の存在者と見做されているのか、つまり存在者にとって主導的と定められた存在意味の支配のもとにあるのか。」(I A, 253)　この問いにハイデガーがどう答えているかは明らかである。従来の存在論において、人間の生の存在意味はそれに相応しい基礎経験から汲み取られておらず、ギリシア以来主導的な存在意味の支配のもとにある。この主導的な存在意味が「被制作存在としての存在」である。

『存在と時間』は「現存在の分析論」を次の指摘から始めている。

「この存在者の『本質』はその関わり―存在の内にある。この存在者の何―存在（エッセンティア）は、そもそもそれが語られうる限り、その存在（エクシステンティア）から概念把握されねばならない。その際まさに次のことを示すことが存

在論的課題となる、すなわち、我々がこの存在者の存在に対して実存 Existenz という名称を選ぶとすれば、この名称は伝承された述語であるエクシステンティアという存在論的意義を持たず、また持ちえない、ということである。」(GA2, 56)

「現存在の分析論」の最初で、「エッセンティアーエクシステンティア」という対概念を批判的に退けているのは、新たな術語の単なる導入のためではない。我々はそこに「被制作存在としての存在」という主導的な存在意味との対決を読み取らねばならない。「エッセンティアとエクシステンティアという二つの概念は、制作する態度への顧慮による存在者の解釈から生じている」(GA24, 147) のだから。『存在と時間』における「現存在の分析論」は実存範疇 Existenzialien を仕上げる試みであるが、それは「被制作性としての存在」をその限界において画定することを通してなのである。「被制作性としての存在」への批判は、次のテーゼの内に読み取れる。現存在という「この存在者は自己をさしあたりかつたいていは、存在的には配慮の地平から了解し、しかし存在論的には存在を物在性という意味において規定している」(GA2, 388)。「被制作性としての存在」をその限界において画定する試みは、一九二七年講義『現象学の根本問題』において主題的に遂行される。

「被制作性としての存在」との対決の場は、時間の次元に求められる。一九二二年の「アリストテレス草稿」においては、未だ「存在と時間」への問いが確立していない。しかし一九二二/二三年の三つの洞察を通して、ソピステス講義は「存在と時間」への問いに定位している。制作は "ἄγειν εἰς οὐσίαν" として、「現在ーへとーもたらすこと」(GA19, 392)[16] を意味する。それ故、存在が被制作存在であるとは、「存在がギリシア人にとって、現存ー存在、現在的ー存在を言う」(GA19, 398) ことである。これは『存在と時間』のテーゼに結び付く。「存在者は・・・現ー在への顧慮の内でその解釈を得る、すなわち存在者は現存性(ウーシア)として概念把握されている。」(GA2, 35)　このテーゼは「現在化すること」としてのレゲイン(語ること)に定位して提示されているが、制作することに即しても主張しうる。「ギリシア的存在論の問題構制は、あらゆる存在論の問題構制と同様に、現存在自身からその導きの糸を得ている。」(GA2, 34)　現存在は「語る現存在」であるだけでなく、「制作する現存在」でもある。「語ることと制作すること」、「ロゴスとテクネー」こそが、ギリシア存在論の根本概

念の誕生の地なのである。そうした誕生の地に立ち帰って、ギリシア存在論と対決すること、しかもそれを時間の次元で遂行することが、『存在と時間』における「日常性の分析」の存在論的意味なのである。

「道具分析の存在論的射程」は、「被制作性としての存在」の誕生の地に立ち帰り、その限界において画定することの内にある。―― このことを示すことが本論の課題であった。しかし『存在と時間』における道具分析は、「世界現象の最初の特徴づけ」(GA29/30, 262)の試みではないのか。「人間の本質が、スプーンとフォークを扱い、市電に乗ることの内にあると、この解釈によって主張し証明しようとすることなど、私には思いもよらなかった。」(GA29/30, 263)―― この言葉から我々の解釈は出発した。しかしこれは次の言葉に続けて言われている。「世界現象の最初の特徴づけから、そしてそれを通して、世界現象を問題として提示することへと突き進むことが肝要である。」(GA29/30, 263) 我々は再び道具分析における「困難な論点」に突き当たっている。ハイデガーは道具分析に関する典型的な誤解に対して語っている。世界という問題において、道具分析の見かけ上の分かりやすさは、再び消え去り、解釈の新たな課題が立ち現われる。

「使用物、道具の存在的な連関を世界と同一視し、世界―内―存在を使用物との交渉として解釈するとすれば、その場合むろん、『現存在の根本体制』という意味での世界―内―存在として超越を理解することは見込みがない。確かにそれに対して、『環境世界的な』存在者の存在論的な構造は、存在者が道具として開蔽されている限り、世界現象の最初の特徴づけにとって、この現象の分析へと導き、世界の超越論的な問題を準備するという利点を持っている。これが実際、環境世界分析の唯一の意図であり、第一四節から第二四節(『存在と時間』)の区分と構成において十分明確に示されている。環境世界分析は、全体としてかつ主導的目標という観点から見れば、従属的な意義を持つにすぎない。」(GA9, 155, Anm. 55)

註

(1) F.-W. von Hermann, "Hermeneutische Phänomenologie des Daseins", Bd. 1, S. XII.

(2) 「例えばハンマーを、ものや人間をぶん殴るのに使った場合は道具的なモノになるけど、これをぼんやり眺めていたり写生したり『ハンマーは鉄でできているんだなあ』なんて思っていたりするだけの場合だとモノ的なモノになっちまう。あのう、ハイデガーってひとはわりとハンマーの好きな人で、このあとも例としてはハンマー君が何度も登場します。」筒井康隆『文学部唯野教授』(岩波書店) 一六〇頁

(3) M.Scheler, Gesammelte Werke, Bd. 8, S. 448, S. 458.
cf. H. Bergson, "La pensée et le mouvant", p. 91-92.

(4) Vgl. GA63, §4, §5.

(5) Cf. R. Brandom, "Heidegger's Categories in Being and Time", in "The Monist" 66 (1983), R. Rorty, "Heidegger, contingency, and pragmatism", in "Essays on Heidegger and others"

(6) 拙論「『存在と時間』から『ソピステス』へ」(『哲学年報』1993) 参照。

(7) 註(5) 参照。

(8) 拙著『意味・真理・場所』(創文社、1992) 参照。

(9) Vgl. O. Becker, "Mathematische Existenz", in "Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung", Bd. 8, 1927, S. 679, Anm. 1. Vgl. GA41, 70.

(10) エネルゲイア、現実性は、「被制作性」から解釈される。vgl. GA24, 147, GA31, 69, GA33, 179.

(11) Vgl. G. Misch, "Lebensphilosophie und Phänomenologie", S. 98.
例えば『形而上学』第七巻第七章は自然的生成について次のように語っている。「それから生成するそれ τὸ ἐξ οὗ は、我々が質料と語るものであり、それによって生成するそれ τὸ ὑφ' οὗ は、自然的に存在するものの或るものであり、それに生成す

るそれ τὸ τί は、人間とか植物とかこのようなものの別の或るものであり、我々がまさにとりわけウーシアであると語るものである。」(1032a17-19) vgl. 983b8-13.

(12) Vgl. F. Brentano, "Die Psychologie des Aristoteles", S. 106.

(13) 四原因とポイエーシスとの関係については、vgl. VA, 15ff.

(14) 「ギリシア語は哲学的である。」(GA31, 50) vgl. GA40, 61, GA48, 64.

(15) 「世界があるところ、そこに作品がある、そしてその逆でもある。」(GA33, 146) このテーゼから『芸術作品の起源』への道が歩まれる。

(16) Vgl. GA9, 281, 285, 291.

(本学文学部教授、倫理学)